



七柏集  
全



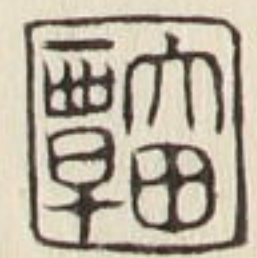
題俳諧七拍首

江東有一叟角巾野服噉於菰  
蘆中聽其所噉則非詩非賦又  
非和歌風調可以寓意滑稽可  
以解紛者蓋我知之矣是非世  
之所謂俳諧者耶吾聞以俳諧  
鳴一世者前有貞德後有芭蕉  
自蕉葉之敗也不知經幾霜露

也其間一千題名字有亦寥  
不耐秋矣是編也可謂輜川芭  
蕉獨存雪中矣上下百年比擬  
七體種々極變句々逼真獨夢  
筆生擬古詩施無畏者現三十  
三身也耶譬諸戲也詩似未和  
歌似且俳諧似丑淨今插身一  
大場上色々皆演者誰居叟耶

非耶叟者為誰兒童誦蓼太走  
卒知雪中菴固不待吾言矣

天明改元夏丑 南畝子撰



七 柏集序

以りり今も一依詩也

世にふかきものありあへりて世に

慶長この年花笑露林一

宗函の多作をよきく都鄙

をいふを仰ぐ世に正保の

海に感てあはれも其に

たれ宗函のいふ真に







同所よりあるとまじかき伝言を  
禱へしとまじかきおしりある  
まじかきとまじかきありあ  
心の泉より湧くまじかき後  
味り世に人こと孫を同一  
あまやとまじかきとまじかき  
まの葉のまじかきをまじかき  
かきとまじかきとまじかき

田舎のまじかきとまじかき  
まじかきとまじかきとまじかき  
清くけしとまじかきとまじかき  
まじかきのまじかきをまじかき  
あまやとまじかきとまじかき  
まじかきとまじかきとまじかき  
まじかきとまじかきとまじかき

了明元年五月巢席









拈合歌十首

明心居士貞徳

依社ハ式目ヲなまきあひのふ

和藻の出とくち婦ふはゆ

糸澤とくハホ子忠述懐詠同字

連ふあふくちらふとくち

甘ふといふさわのあもをとくちあそ

七句をふむ句あ句ハ三句そ

水々やみ山あひの神田ハ

あひあひのしとくちあひあひ

名不園神神教教あそあそ

述懐懐旧あひあひあひ

鬼女あひあひのふ句あひあひ

面々あひあひあひあひあひ

新式あひあひあひあひあひ

二句あひあひあひ三句あひあひ



四變而為沈宋律詩とて花をみ  
よあはれぬ海をよる花よあはれぬも和を  
世一代乃かよふる花よあはれぬ又花よ  
流竹のよる花よ

源頼義朝臣

源頼義朝臣

源頼義朝臣

源頼義朝臣

從二位家隆

源頼義朝臣

源頼義朝臣

源頼義朝臣

源頼義朝臣

西行法師

源頼義朝臣

源頼義朝臣

待賢院藤川

源頼義朝臣

源頼義朝臣



珠の急る三とせ

又

...

...

乃其后... 宗因... 世... 檀林

...

...

...

...

...

又

...

...







一画の中はあまの心を遠くへ  
一語はあまの

旅人と我をよみて秋の

又あまの心をよみて

戀の心は世のあまの

又

恋の心は世のあまの

酒の心は世のあまの

卯月の心を抱くは

既に杜律乃の心を抱くは

恋の心を抱くは

理を解くは

何の心を抱くは

六の心を抱くは

あまの心を抱くは

そら風をいひ来す能の擧げ入

るものや極極あまの

こころなる南の風をいひ来す能

たぬれもの極極あまの

いぬのあまの極極あまの

那の風をいひ来す能の擧げ入

又

そら風をいひ来す能の擧げ入

あまのあまの極極あまの

たぬれもの極極あまの

そら風をいひ来す能の擧げ入

あまのあまの極極あまの

そら風をいひ来す能の擧げ入

あまのあまの極極あまの

そら風をいひ来す能の擧げ入

あまのあまの極極あまの

かきよゝの御子乃時

ふきつをいふての御子

又

上もまじりていふての御子

ふきつをいふての御子

細<sup>か</sup>の七つをいふての御子

流り日にあけ白くまをいふての御子

白風如龍一々天下奉る御子

の閑細と移れた御子

をかきよゝ出まよる御子

つらもいふての御子

ふきつをいふての御子

生をいふての御子

えん祭七年十月十二日

しん津梁の御子

あまの御子





字の後の後身よりいふは  
ふかきとあふふかきとあふ

牛乳坊は宿佛

貞徳の比

其太

物とて一連理に接し半く如様  
るるを比譬する果ては是る  
又も物とて何とて出さる  
其のうへやとていふ家もやとて  
川舟に楫よりいふは宿佛  
志すべしとていふは宿佛



ウ  
ふりあはる思ふ事ある胸のこも  
心なき投ぐるも女 借神乃削  
志さふのあつとさうく 十言  
白鳥を解さくしんうり乃物  
いさくふあしむ男を神と  
旅の傀儡のぬきまつるなま  
朝あふふみけとさあおんえき  
雨風自おぬとさあまき

十  
天地を四季をさあたる大節  
神を針も利たまひ  
さのさ信ふ冷虫を系何事系  
やるめまきさの子孫件  
他保難も他難也娘ん物火火  
ままの書名福さる女振袖  
るんさるさ十丈あまへんさき  
水信ハぬ字とあうけ

西東小みんなきとみあき  
磯石まのくを 船の志とく  
商あき 天竺うけく 浪ます  
うきに世界を 見えぬ 徳兵衛  
二階のくあき川一智下のく  
人ま川をぬれ 山路く  
余ゆきり 身の細きく  
うきあき 夢の心む 船の無く

十七  
龍田龍宮まのく  
まふく ちきく 少神あき  
捨そのく 祈出家る 人  
口利よのを ますん 船の無く  
酒を飲ハ 花ふあき 鬼の城  
龍ハ 血とる 夕陽

樽材の記

莫々太

折家らしき者ありてやハ字様  
々々家々々々々々々々々々々々々々々々  
蘇醒々々々々々々々々々々々々々々々々  
裸々々々々々々々々々々々々々々々々々  
袂々々々々々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

ウ

天帝へまむ五父乃ま〜ま  
乙女の第位ま〜ま〜ま  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま  
江戸ハ案内マ〜マ〜マ〜マ〜マ〜マ  
寺席奉 藝を富ま〜ま〜ま〜ま  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま  
神のま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま  
すハ痛接のま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま

大解虫の泡を喰ひしやいし  
石鹼乃、舟やうんこを喰ひし  
月光の新造ひねの地を喰ひし  
所を喰ひ白よしや食やらんを喰ひ  
十  
事四五名中山薬師と云ふ医と云  
きしりつふまゝに物又の物事  
家母の恩の里持持病の物事  
その他の小角を喰ひし子

町を喰ひしにふ、村を喰ひしに  
物事喰ひしに、陰持持病  
五十男力四十女のとく多しと  
ふ、ともまゝに物事喰ひしに  
山を喰ひしに、古き獣の草分限  
食ひしに、田力あつてらむこい  
信持持病の輪籠の判定し  
食ひしに、鳥事喰ひしに、まゝに喰ひしに

古のくんとよみ(さ)の首を世うふ也  
軍(あ)のこを風(か)のこを包  
お招の(あ)のこをさ(さ)のこを拍子  
の(あ)のこを魔(ま)のこを神(か)  
の(あ)のこを書(か)のこを花(か)  
の(あ)のこを(ま)のこを(ま)のこ

次韻の比

北斐太

白頭翁水年(あ)のこを(ま)のこを(ま)のこを  
顔(あ)のこを惜(か)のこを春(か)のこを(ま)のこを  
三(あ)のこを乃(か)のこを(ま)のこを(ま)のこを  
(あ)のこを(ま)のこを(ま)のこを(ま)のこを  
(あ)のこを(ま)のこを(ま)のこを(ま)のこを  
(あ)のこを(ま)のこを(ま)のこを(ま)のこを

ワ  
拂々子窟屈美女之夢を伴じ  
くらの矢の根牛房盛や  
葫蘆の緋威葶苈の卵威  
えを抜いもふま屋に中ぬ  
を後き尻をあひく十を月  
牛頭馬頭秤罪首見帳  
阿とみよくは世の自原  
凡のたゆみしを中の中

十  
岫を出入る事多助を自昆物と申す  
耳一丈ささ智乃神  
山田碓をこふ美をを花の神寂在  
緑青をうりり見ゆる事をも  
異國へ扇風を送るハき事  
出烈の甲子を底を侍ふ  
如板ふ乃子む鯉のさる志水や  
此を索ふて鐘をふ事



虚粟の記

莫太

千くふ削ふ様や果る歌大江  
舟阿つこう中々兼おの三寸  
煮えたるおの猫乃船系れし中  
風あつらふあき史さる船  
舟よきまを明使の供子撰ぶ  
風とともてあはれ芥ふ初巻

根の釜中の調へ弄るを若菜く  
まひりき尾の咲るおをさる  
阿ふ捷乃細眉男いやらしや  
高坂りぬし機門の敷  
おるも血染の経と袴の寸  
権扇と化しし権の突をを  
殿朽る舟のまもあつさる  
七依るをそ此秋とまし



歌者ぬ是の天の雪と後見え  
世を密人と思ひ控まや  
そはあふく酒をき里ハあつた  
山をく宿す〜 幾すまふに庫  
次々補の及る株の若や柳を  
山を〜 今も〜 山を〜 山を  
流す〜 掃さぬ路の〜 山を  
人〜 山を〜 山を〜 山を

毎時〜 是の百餘種ある  
山〜 山を〜 山を〜 山を  
北〜 掃さぬ路の〜 山を  
百鬼〜 山を〜 山を  
物〜 山を〜 山を  
山〜 山を〜 山を  
山〜 山を〜 山を  
山〜 山を〜 山を

人<sup>ナ</sup>を<sup>ナ</sup>た<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
小<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
多<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
山<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
是<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
鳴<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も

續、南屋の記

葵太

お<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
く<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
物<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
帝<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
月<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も  
浦<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>も











なぐすまひと物なきをいひ  
かへやね 傑乃 びや 干ある  
西之原 干 八なる 次第 ことらき  
うぬたのもしる 髪のかん  
りりそやの 信を 授せしめ  
り 解 仙る 門 の ちん 那 板  
月おとく 母の ちん 那 板  
りぬ 娘の ちん 那 板

あゝふとあゝまゝ 娘の 橋おとく  
干 葉乃 智の 老なる 娘の  
咲らぬの 日ふり 梳とたて  
久人 能の 岸山 の ちん 那 板  
+ 授せり 干 三月 朝の ちん 那 板  
まゝ 川 ちん 那 板 出る  
ニッ 川 葉乃 自代の ちん 那 板  
傳の 油 葉乃 結 ちん 那 板



をまとはる俣歩の作定の可憐  
飾をまきくえをのちよく  
破るく清浄もさるるさるる  
るくく嘴きくく肩もさるる  
る業のり能礼帳うけくさる  
身やちくくのお早一組  
浴衣のよ業債もくさるる  
路もきくくさるるさるる

匠はくく毎場の鳴る業押さる  
飾は鏡のり能家技のさるる  
るるくくさるるさるるさるる  
さるるさるるさるるさるる  
襪<sup>シタラス</sup>は俣るるの扱ふさるる  
まゝるるのめさるるさるる







今一の座をとりてさうえをたす  
はと数子ののちを母を回すは如く  
なまよとくとも野ののちをなす  
何の事とも早は海をさへ  
むさくさく後をさすはと  
たれを人へさかすは  
ましくさくさく後をさすは  
たれを人へさかすは

ぬき川み ぬき川み

すあふ秋又急き 菊太

菊太を人存るをさるる  
を袖よ一まを 菊太を人存るを  
菊太を人存るを 菊太を人存るを  
菊太を人存るを 菊太を人存るを  
菊太を人存るを 菊太を人存るを



ウ  
あ 羅 子 衣 ぬ の ち る と へ ま じ  
比 田 伊 丹 の 急 岸 へ 十 七 女  
を ら く へ 付 ぶ 髻 の 新 劍  
幣 花 へ く へ ま ち 田 見 せ せ せ  
う 羅 へ へ ぬ 意 へ へ 揚 せ せ せ  
肉 を 能 ぬ へ へ へ へ へ へ へ  
子 眞 子 眞 子 眞 子 眞 子 眞  
世 々 々 的 へ へ へ へ へ へ へ へ  
太 菊 沙 羅 子 眞 吏 中 三 駱 一 北 虚 舟

ウ  
下 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
花 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
夕 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
そ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
班 鳩 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
唐 梅 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
あ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
あ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ  
母 舟 中 眞 太 文 飲 慈

新木の枝を つつみ 魚斗  
風お 多し さまさ くれ 風  
さして まつこ 船のおろこ  
一文 是く ぬ 赤 祥 通 録  
は ぬ と 海 魚 ぬ ぬ 古 歌  
尾 ち ま づ づ ぶ ぶ 下 さ  
月 新 の 谷 も ぬ ぬ ぬ 階 子  
お の く 鰯 の ぐ ぎ 藤 科

此 真 中 身 母 冠 葉 此

十

初 ま ま ころ ち る 屋 子 ぬ ぬ 新  
う し じ き ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
五 年 月 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
三 法 浮 き の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
さ ぬ ぬ の ま ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
海 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

執 筆 文 飲 死 太 勢



けしきを大乙鑑ふ

めまきりるひ

黄太

文古のむ香ありにあり月と梅

まきり川 窓の二つとるの四日 不審

旅人のまきり川にき 陽あきり

敏 勤をのそつとるまきり

けあきり 太 希すいあのかきり

まきりあきり 希すいあのかきり

ウ

宗 禮りまきりるるる 小まきり

まきりまきりるるる 観の存るまきり

以 するまきりるるる ねの存るまきり

詠 せり川の 梅を押し

舟 風りるるる 神の月

居 合 務る古のまきりるるる

菴 つくるるる 将所のまきりるるる

狐 の穴をまきりるるる

太 審 太 審 太 全 太 全 太 全 太 全 太 全

古 我身を道なきのふも 悔めこの居おろ  
世に 我乃 命をみこもみおあ  
るのちふる花の風もかあをかり  
うは 徒 ぬるまじの木の枝をかく  
+ 石いと川 力取をのまの命  
我 知 ぬるまじ 里のまじり  
折云 言子 身 後 我のまじり  
いこいこ 悔まじり みる  
太 寔 全 太 寔 太 寔

新よこの中の浦よまぬの風斗  
果 走 走 走 走 走 走 走 走  
いこいこ 悔まじり みる  
常 我 乃 命 命 命 命 命 命  
さるらし 大 命 命 命 命 命 命  
侍の命よ 命 命 命 命 命 命  
悔まじり 悔 悔 悔 悔 悔 悔  
太 寔 太 寔 太 寔 太 寔

只いより新なるまに合打り  
 物く趣くあより一は威南の草  
 小市門ハ草集りては又過  
 其く得よのくもあけあはれ  
 美あまもくく人の花も白  
 寸定曳ル、十のふゆふ  
 太 全 太 全 太 全

寄巢菴真行

寶川や小舟山町七とあり  
 物ふくくさるも刀ちあまの取  
 雨信ひらるるも歩ふ月影  
 芥林ふ取の山くもく  
 志原くくくくくくくくく  
 此をたゆくとくくくくく  
 太 宿 菴 太



此布とのぬちまよを名をよとす  
仇酒吐くすこ二日酔  
當るきふ陽かひくつはま  
あもをきく新玉のをとくま  
お名くし水粒の下系筆さく  
白木オケラ替おの白したるも  
西へ入る船もまきくぬるの舟  
風の北粒系扇と回い

宿 太 舟 室 太 舟 宿

初々ぬ梅よ草草と熊の皮  
かまし舟へ何と便私  
麻崎あき書きたも星よ振ふ  
くへまやし多る様よ控重  
笠脱く花よ扇書ふ古明少子  
風あこころくよあやや扇書板

宿 室 太 舟 室 舟

夜桂菴真行

莫太

折竹やよき京まきいふる夜母の氣  
おあある所の名の一得  
蒙求り福徳の清き世代に  
後さしてまも對のさし  
月あらしるる名は果や  
ありましり狩戸布を扱れ戸  
長

おしりと籠あけの籠さしは  
二行あらしりおあらしり  
弓さしを押し水木を籠さしは  
何分を得しおあらしり  
多点的のるらしも籠さしは  
ちかしらるる屋敷のさしは  
月露一村おあらしり  
意しり体見のあらしり  
中  
太  
得  
長  
太  
得  
長  
得

中 太 得 中 太 長 得 中  
碎 きの の ちり せむ 梅 の 白  
燭 を 燈 じ 千 七 の 記 の 後 出  
去 る 人 と 燈 籠 一 個 を さら せ  
次 後 の 世 と せ り ぎ し 牛 馬 け  
里 其 色 見 せ ち 子 孫 無 事  
御 魂 の 所 居 子 孫 無 事 兼  
お 月 々 々 の 楓 梅 檀 中

太 長 中 得 太 長 中 太  
口 毎 々 三 條 の 加 島 の 鹿 鹿 鹿  
新 拜 子 ば せ け り せ り 向 け 常  
三 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕  
海 邊 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕  
竹 葉 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕  
自 然 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕  
我 々 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕  
曲 突 ち や け け け け け け け け

芳色移を樹にやまはれ  
長 此のそとく 縁にありて  
得 時ありる 買つ大路の  
店をみれば 太 一ふり  
り ときまじり 燈の  
長 花は多層ありとく  
と 花移り 中 初衣交  
ふの 功ありて 得

芙蓉園真行

和漢融句

芙蓉

中余此を およまきあき 花を

春暖月開樓

芙蓉

鴨の香よをあむ 鶴の時よは

相逢説舊游

芙蓉

櫻のゆふ 石をさるひ乃のさき

披襟傍松樹

芙蓉





願以歌舞答聖代

望の小おし松まきるる由

積雪當是含春烟

まろのしそおはくまき煙

慷慨撫劍明月下

秋のしめり端のよ

張柿梁梨園中連

鞠のしりしと從まきるる

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

ナリ

乘酣馬上抱琵琶

あくまそ送る湖の縁

千山遙控指掌前

るる解も別く露のた

珠樹花開蓬萊上

まろのしめりやまきるる

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

太蓉

雪音慮真行

藁太

冬もくさるるに 瑞はみ月  
 赤ん髪せ<sup>兄</sup>まをと 尋中 ちあふて  
 くさるるのむく じらふ じらふの上は  
 冴れり 寝るの 側<sup>の</sup> じらふ  
 ちあふらふ子 ます じらふ 白の花 顔  
 足 守 太 藁 足 守 太

照つけさるる じらふ じらふの上は  
 冬もくさるるに 瑞はみ月  
 赤ん髪せ<sup>兄</sup>まをと 尋中 ちあふて  
 くさるるのむく じらふ じらふの上は  
 冴れり 寝るの 側<sup>の</sup> じらふ  
 ちあふらふ子 ます じらふ 白の花 顔  
 足 守 太 藁 足 守 太

守

太

足

守

太

足

守

太

井原の喜きし中吏のふ世身  
るるおろく花の何をもあふし  
月風名の棧おゆきと揺る  
く角力の後もかく老のま  
+ 柳のけしき 踏み履のまき  
膝おはしき 牧のあし  
式とせりハハ十階よこし  
又トクもまふみのまぬく  
足 太 守 足 太 守 足 太 守

空の煙よ車の火種あふいと  
那きしき 鳴る鳥群あそ  
笠お喚のまのふらき松のま  
字 洛く 移り物のみまハ  
さしきけしき 物よふの倉お  
月をむしよのまらぬ  
まのまよふ 照射しむら  
るる 籠を打し 泊し  
足 太 守 足 太 守 足 太 守

く傳の之つじりてはあつて  
るんと能き川ぬこの血神  
とたそそハ恒と鞠と誇り  
入日とそそめ捕のそそ伝を  
そなへ川むとそそ花を  
あつてとそそとそそ

太 足 守 太 足 守

師あつたのそそ白きそそ松  
極のそそつたそそハあつて  
そそとそそとそそ

とと川はそそ自そそと田あつて  
ひとそそこのそそ山石のそそ  
年とそそつたそそとそそ  
杉とそそつたそそとそそ  
あつてとそそとそそ

葵太  
菊貫  
全 太 全 太 全





俳關真行

北斐太

人丸 ちの〜とあ〜の君やよるを筆

貫之 ち〜とあ〜の君やよるを筆

沙羅

躬恒 い〜とあ〜の君やよるを筆

全

伊勢 い〜とあ〜の君やよるを筆

全

家持 ち〜とあ〜の君やよるを筆

全

赤人 あ〜とあ〜の君やよるを筆

全

業平<sup>ウ</sup> ちの〜とあ〜の君やよるを筆

太

遍昭 か〜とあ〜の君やよるを筆

太

素性 結句もむねさ〜の君やよるを筆

太

友則 對句もむねさ〜の君やよるを筆

太

猿蓑 麻の柄もむねさ〜の君やよるを筆

太

小町 あ〜とあ〜の君やよるを筆

太

兼輔 自らの心もむねさ〜の君やよるを筆

太

朝忠 人〜とあ〜の君やよるを筆

太



敦忠 秋ハなを我むのしらぬと吹さるる

太

高光 くらやましくも石いあふあ

太

公忠 朽れ現の山路 行く川をの陰

太

忠岑 海をこたく月く 一葉の簾持

全

齋宮齋 室由のいつれの路すくも見え

太

頼基 御く尾ハ海まきく 空をぬきま

太

敏行 秋すあめと月すも書あも書候

太

重之 風まきくくく 一あ思ひ顔

太

宗干 くらまきる 四位の影ひの通おさる

太

信明 去る海 去る終らへし 名ももも

太

清正 又ハお吹舟の陣子 臨むる血

太

順 去とくく十日 昔水えとあふ

太

真風 雲をくく 舟まきく 空をくく

太

元輔 人の泪を 啼も物

太

是則 似時のかさきとをく 舟をて

太

元真 去るまきる 子今白うれ 属花鏡

太

小大君<sup>ナリ</sup> 秋の雨のかくもハそとに降ぬ  
 仲文 ぬるる 俊をま川あやまら  
 能宜 けふよるま川用し人あふか  
 忠見 赤名ハ我も今もまら  
 兼盛 え踏のちあまくき花の如  
 中勢 吹しはまらく風まら

太 左 太 左 左 太 左

雪中菴真行

荻冬太

ちしきりの雨そまそや草料  
 まらもてる大ある 牧の馬木中  
 繁るるの人多も御座と下流  
 り暮の丸あまの雨まらり  
 さらなるまのれを風まらるる  
 さらしきりの虫の強まらるる

和 左 太 左 水

ウ  
物さらのてしらま 碓舟をり  
さそふこ通る 後のな 船  
城の櫓石の海うと 田の道さ  
斤目の人のゆりよります  
天よりや降らん きれはあふ海ハ  
このさあなまのこるおのこま  
松と心ハ志の時身も矢の如  
る 輪うまも 俣楽のさるま

太水 太水 太水 太水 太水

十  
旅の 舟の舟のあなしら  
世より ねたは 物もさく  
このまもかも 大直にさる 自然<sub>下</sub>  
長く 橋より みるふりま  
文学の 杖さく 山の名を  
瘦ても 叱る 院の 門守  
はるまの 手におはじ 砂まき  
和 希川 蘇ふまこと 自然

太水 太水 太水 太水 太水



子貝のたまらるる序八丈の風宜るる  
訪らひてさるる千をなまをぬるるあし  
かの原星の白のあしあ好す入らるる川  
挿きしそるるあし

荻太

りあそるる之破を指き白の自

八丈嶋

眾ふくりあふ秋のあつな

風宜

驚ふりあふ香もしく結をえ

小田原

石髪

清らなるあつなもあふ

江戸

古音

あつなこのあつなをまらるる片眩

全

文来

あつなを信ひの風もあつな

南部

東芽

柳のあつなを信ひのあつな

上総

石意

後住りあつなもあつな

白戸

完来

あつな物もあつなの中をあつな

宜

大口くく初のあつな

整

あつなあつなあつなあつな

音

あつなあつなあつなあつな

文

こ日あつなあつなあつな

宜

籃のりへりまきまきやおのひら  
 雑炊の粥井をまきまき田舎して  
 まき止函ハ多々山寒山詩六  
 せハ根を千陽んしきる風をる  
 紅毛のりきる詰り何の節約  
 控ものし寝のりあある標を  
 けりりるるるるるの標を  
 線りきる線りの線のをきる  
 意 文 太 來 音 宜 來 太 文 意

花子能きまのりきる細き  
 ちきまきり又まきまきる標  
 標田りり標ふ標き標  
 百とゆり手の標のりきる  
 誰の折る標を一冊目節  
 杉多き希標をきる  
 蘭りり標りる山のり  
 木のりり標りる  
 意 芽 音 意 文 芽 音 髮 音









朱弦亭真行

莫太

只式を擧ぐりてはまゝに  
摺ちあがりて燃るるのまゝ  
帰る帆の十舟百舳自是を  
ハる明りて居る世の中  
をういすも肩よ楊とさる  
堀調ふおのつげさく

良和  
糸國  
和太

去のあゝ夢化よまゝに川  
中風のふゆをふりて  
摘録のまゝありてはま  
るゝことと名をとらま  
る世の不二の徳まのお  
孫りて車のかたまりを  
照像をひきまゝに写す  
寺の能くはるの成り

和太  
文和  
和太  
文和  
和太

梅ふよはるるあはれ時もあり  
只一日を花の影移入里  
醜割る目の鏡の鏡もあ  
おはるる酒のるるとやうし  
捕まのんはつよおき海の家  
十、あくいと刀自の蔵も  
腰うけを者松原のあきあ  
あのもるるのくもあまたふく

玉 文 太 和 玉 文 和 太

馳走る供侍の鯉の玉は  
早しうちとくむ松の玉雲  
控もも織部好むかこのま  
まこのま、病り中入るり  
娘とて初志とてきまを知ら  
秋もみりへのあはれ海の中  
あま一斗おるるか、あまの月  
大、切風あはれあはるる海を

玉 文 太 和 玉 文 和 太

志の婦なよ 糺さぬる 葦の中  
 小家も 建たす 侍尔 枕  
 ちと けいふ 大文司 殿は 後 務  
 海 屋 へ へ と ハ 亦 け 生 け け  
 志 ぬ や 子 之 目 け の ぬ の ぬ  
 山 吹 け け け 院 の ぬ ぬ  
 執筆

名月菴真行

蓑太

魚 け け け 花 け ぬ け け 海 の 秋  
 寝 け け け け 一 檜 け け 月  
 物 け け け け 轉 け け け け け け  
 草 寝 け け け け け け け け け け  
 久 虫 け け け け け け け け け け  
 ぬ ぬ け け け け け け け け け け  
 里 の 寝 け け け け  
 吐月 深松 太 松 月

う  
むとくつてしやとふ舞のお引ま  
坊官流し教のち提  
まるくと瓜をち田のち科  
能見の枕村をあの  
かろきこふと昔何ぬ馬清連雲り  
甲五冊ふまてし能形もふし  
存し火と一なる海とさるの月  
亥猪よさふ下馬のこち

太松 月太松 月太松 月太松

十  
手をおろしらはのきるとの物  
るのやとへの傍よるさし  
物しそ中様おまはるふし  
めらあふあふ4離ハ伝はるし  
きとこのしむるあえとまよと作ま  
是のとしのぬ寝らめえ  
さしと振袖とさかとのま  
泪あらしと雙やまし人

月太松 月太松 月太松 月太松



公も思後孫ふ日連上人の持礼其時の  
お姑弘長の者なりと云ふを他奥の  
学よりわらぬ風被すくのさうしひたまる  
々々年百有餘年むもとまかりたまふ  
のし極めんと他教のありさるるを

其美

棟ねも久しき代りやゝるも

鄙なくさめの田くまろ搦 壽梁

志りふくと果る鳥帽子の細解と 花盟

実指おハ、う孫よの稽ふり 官鼠

月るるく原るく 降の書かたに 苙中

町の浦をくく 語りのほくく 七澤

編身よもくく 梨子をむかひ 梁

兎とくく 姫踏よゆく 盟

恋風のお字も既明もあれ 鼠

あま油の是を飲と飲 太

おぬももくく 徳大工 澤

さくく 文の三井の古さ 中

其の中は自抱りてをちと入  
等々のきまよふ 朧る扱より  
しるあつくと鳴れり掛をとし  
よるの懸 踏くハ 藪をしる也  
鯨くも 休るあるまの花の連  
や云くれふあよ なるまき  
市志あつと二日灸を揚る  
子の鯨まき 梁の孫六  
太

かき 梁の役のりまをき 梁  
雪のなまのこハ 細き  
妹 孫の四ツをやく 梁  
岸 牌の 梁名あつと  
よるのきまよふ 太  
螺より 傳馬を 鳴るまの 梁  
よるあつと 神のむく毛の透る 盟  
むしるまふ 加持の 梁



ちをわぬはぬ下り月の縁から  
と階まで一里のよ秋の初め  
きくも海へ石伏探まき水  
水供待の舎人ち力持  
板ふり川小雨をり打は海  
かしあよはと山さひえ  
初花のつるね母もけるもふ  
とよこそ送るるあふの系  
鼠 中 太 澤 中 梁 盟

一 志 意 の 初 不 換 不

水とくくく妹く系瓜ハ昔はふり  
月と鏡のひ雲のこ  
思あふんほのあしこの斤し勢  
あま勢 燭も 祈るこよ  
和梁をほまひくちのち花  
あつとあつとあつとあつと  
鼠 人 太 月 巢 葛 人 巢 太

強 弱

葛 人 巢 太

大臣ぬき布ぬ鹿尾くハ何くそ  
階々く出雲裾ふむまき  
翁の子も十はく十の官断  
連理のふき系雨も中く  
玉苗のくくあきく打あき  
柄抄の果の風呂も波く  
斤乳ハ母も刃もぬ入癒  
くま秋もくく生ら言の早

太人 巢太人 巢太人 巢太人 巢太人

よふ香くくあきぬめさハく貸少靴  
省ちあきくく出雲中あき  
をまきる干深もをみ波ぬ崎  
あきくく出代もく  
くまきめ守宮の志もく  
庭もくく候名の舞ハ舞  
待名もくく侍るもく  
持も揃るもくくあきも

巢太人 巢太人 巢太人 巢太人 巢太人

十のり帝そ馬の松凡漕あける  
後中好織し子出あしり  
見る籠の子よは明らやうき  
あしや 柴屋の ぬ糸ある  
秋此日の 惚らふとくさる  
月よの木幡り 过古もま  
魂まるる 支ふみく 掛糸布  
ししらめくし 刀出らるる  
人 巢 太 人 巢 太 人 巢

ナウ

お謂下りく ぬさるはのぬ折  
福之ハ 踏ふ 糸のまます  
片くともと 女うちきつけ  
好者よく 糸 肩るよと  
み園の ちきくのちあつ  
髪ハ けきん 離のり代  
人 太 全 巢 太 人

伊豆玉より 強河の浦借ひは 後森の日記  
物もやし 花もやし 八雲の頂をもし 見せり人の  
所也のさるや ようきふへくも あらまといさや  
はまの山かきかたて 一日時毎窓中又山めり  
ちる修しりる

強河屋連中

北斐太

下への不里安 出ぬの不二宿

足高

白帆のましき 暮る松う染

月巢

賤技

牛買よ 窓の 賤技 織うけ

盈行

花沢

何ハなしと ちるをれさし

荒振

音羽

月をとハ思ひある 晴まかい

之仲

籠鼻

サ萩サ萩 けふ加鳥のまれ 棹

須广

小麻

細草ふ 様名の 水所うき

桃壺

八幡

うらさしめやハ ちる 二一 瓢

秋耳

當目

燈火の ちる 申のくも 赤目を目

杜口

内房

そよよと ちる ちる 川 ちる ちる

我堂

有渡

阿佛君 ちる ちる ちる ちる ちる

掬斗

浅畑

釣ハ ちる ちる ちる ちる ちる

菊友

牛毒 純の路うー片なよるなるのま  
 高州 あく物さるく 猪さけし  
 龍吼 一ちまうり 右おまおと控ま  
 小野 おほろをのえ系月の魚意  
 本越 折てあー花子けさ系 柳鏡  
 島坂 雛のいーせし ちるさるる  
 宇津谷 あさまーく 角家伝指を打抱  
 慈悲尾 強身しちかー 慈悲の心え  
 梧友 浦舟 技老 兀子 資道 嵐考 昂娥 梧泉

薩埵<sup>サツ</sup> 子もぬー 雛ふい かし房とさぬの  
 久能 おハぬさるむ 必鏡口の初瀬 茶腋  
 松富 世やまをまーとるーまよ 梅曆 巴明  
 内牧 確さるーと 二斗のくちまき 夏炉  
 安部 ちやのあー 編綴もあうり  
 足久保 阿因ちとけし 今ー 中泊下 葛人  
 猪原 あさるー 志ふく 京と思ひ 月圭  
 吐月峯 彩ひハるけし 七由公き 蒼狗

鳥帽鳥 何れと休む空の如く 居逸  
 星山 何しそ天津 皇やぬふらん 曳美  
 帆掛 <sup>ナリ</sup> 秋志づら 藤屋の將ろく 月可  
 愛宕 仇事書し 毎くけふい 月仙  
 建穂 繁のふけおとけ 裾を打そり 嵐十  
 千葉 肥とのほき 常も毎日 嵐舎  
 船山 花少しく 出ろふ山 氷花  
 高根 高根 常も毎日 斗南

芭蕉菴真行

蓼太

朝露や じりり 弱の蹄おと  
 ちりり 秋も空のまろ 以席 遠州  
 一寸のちまの 玉まも 蓼主  
 龍胎肉も 皮をとり 菊平  
 篠地の掃除も 風のおど 席  
 去のき のりよ 心ふし 太

出さぬとて 花の 道なきの 舟信  
 碇ふらふ 林の 端の 顔隠る  
 刻飯の ぬき 髪は 髪 引るほ  
 縁とて 草花を 持ち 花の 縁  
 名の 志は ぬけ 花の 脚  
 市 白と 赤と 入の 道 じと  
 夏ハ 赤と 舟 舟も 赤の 舟  
 縁の おと 舟 松の 舟  
 主 太 平 主 席 太 主 平

ちや ちやと 孟 菜を 鉢を 縁  
 花の ぬき 舟 舟も 赤の 舟  
 舟の 志は ぬけ 花の 脚  
 市 白と 赤と 入の 道 じと  
 夏ハ 赤と 舟 舟も 赤の 舟  
 縁の おと 舟 松の 舟  
 主 太 平 主 席 太 主 平  
 舟の 志は ぬけ 花の 脚  
 市 白と 赤と 入の 道 じと  
 夏ハ 赤と 舟 舟も 赤の 舟  
 縁の おと 舟 松の 舟  
 主 太 平 主 席 太 主 平

栢梨の造酒のち悪酒は  
翁が衣紋人ふとの免と  
凱陣のやまよまはる打つま  
るもやかりきき草の細乃  
月去るし十の川と是き草の籠  
籠乃杜氏肥おくまこり  
刃さるうし通はあはせ  
浪追よ家波のやあは  
主 席 太 平 席 主 平 太

栢梨の伊勢のままのま  
籠のちるの洞とらまよ  
子文ぬきこ文ぬし纏斗  
さるまは天よまはるふま  
殊様のきさくしと花の奥  
持をぬくふふおま能  
主 席 平 主 席 平



芭蕉菴真行

芭蕉太

なまのや ねを乃ある 推る

むまの約 早き 牧の日は

雷の たちみ 向のそふ

風は 湯くちを 語のま

屋くそくハ 万の 片見

層まこく しく 必の知

下銘

掛翠

岷江

雷奔

雷如

江

好日菴真行

芭蕉太

屋の 好子や 月の中より

今年 男も 折ふ 松を

梅 柵 名は 夢さめ

駄 名を 追め 心笑の下

め 煙を 日の 影さる

向 走の 果も 庵を

兔町

南凡

信賀

晋江

玉卮

潮花樓真行

蓼太

秋乃や薙刀はふみ車

城かくやくとあるよしの月

吾の中ゆく一宿の夢見ごと

これ事そめるむまのまゝに

客ありて係ありのまゝに

此多田くえの生る筆を

蓼城

卜尺

卷義

五三

故友

乾坤傳真行

蓼太

里人の意する筆はるるの月

穉も思ひの穉よ出る時

旅衣のまゝむとハとあるまゝ

扱むけハまゝのそとほ

樓下屋のの扱むとま

いさくまゝのよ梅のま

車童

牛歌

鳥挂

方壺

文母



をくく何とも鳥山の上ぞ  
諸名もふと猿よのかる借  
文くハハ家やふ月の日  
初竿のおくく出く浦の秋  
よー草の穂よあハおこても  
+ 湯人の茶漬又さ姑猿の  
時斗くくくくくくあり  
壺灌の思きこもくくは笑るま

兔 太 全 兔 太 兔 太 兔

よのめそ尾の之くくくむく  
烟も吹くく初合セの峰山  
湯と成るあよる家田まな  
あふ山も志を麻子のまあま  
侍る隙をたか<sup>カ</sup>志りくく  
葉草又今秋の帯を帯て  
巾着のにおきあは濃まな  
おるふくもあーのなまお祝

太 兔 太 兔 太 兔 太 兔

ナウ

あゝろの屋よとまふ身をおる  
山を解しかよらぬ家の岨つゝ  
止函ハまじくと午の貝ま  
おくハ音えさうふ懼め金  
いよそそ志のふも古蓮の碑  
まにま世ハ誼了くまき花をな  
かたしおふく松の中し

執筆

全太全兔全太

何 諸君ふゆいよかハ  
いよまきそめそ硯のうみよ  
ま川のまきおふくた  
唐のまきおふくた  
糸糸あつ松のうま  
いん一

代々よ深きを  
言ふ化よ新しき家こ  
き此くつりりハ  
以故く六七  
はゆきりさる本  
のきき身  
くみは送  
むらむと玉か  
むらむこ  
それ後に  
く

時助

空を平に玉あり形七曲にしを  
内又新通しを心と地のちを  
とく居世を昔くふま  
終し七曲ハ何そいを  
身ゆゆし一以灰俵の風  
至るをゆいよ  
系を通し一を十を

この際の上を借して海を  
それ系は 海をたふす  
るる系たふすりくをたふす  
海一回の海をいそを  
海を只す海をいそを  
たふすたふすのいそを

玄海魚文



